



連載 剣道具の製造工程、すべて見せます

続・日本がつくる剣道具

第五回 世界をリードする製造現場

構成／本誌編集部 写真提供／全日本剣道具 協力／三栗野真也（全日本剣道具センター）

90年の技と覚悟 日本剣道具製作所と全日本剣道具

全日本剣道具、日本剣道具製作所の代表である川辺尚彦氏によれば、世界に、日本人が経営する大規模な剣道具工場は二つしかなく、その二つの拠点こそが、今日の剣道具の品質と基準を、長年にわたり静かに支え続けてきた存在だと語る。

世界中で剣道具は使われているが、その「原点」がどこにあるのかを正確に知る人は意外に少ない。

川辺 約90年前、世界で初めて「ミシン刺し剣道具」を実用化した工場が日本にありました。それが日本剣道具製作所です。現在当たり前となっている防具の形状や量産技術の基礎は、すべてここから始まったと言っても過言ではありません。

針の刺し方にも斜め刺しや具の目刺しといったいく

つもの刺し方があり、幅や形状もまちまち。つまり、刺し方ひとつを取っても、剣道具の世界には無数の議論と改良の歴史があるのだが、その進化の出発点が、世界で初めてミシン刺し防具を確立した日本剣道具製作所だと言う。

川辺 現在、日本には個人で防具を仕立てる職人さんが今もいらっしやいます。しかし、「工場」として数十名規模の職人が同じ場所で防具づくりを続けている製作所は、今ではほとんど残っていません。

宮崎県にある日本剣道具製作所には、現在も約60名の職人が在籍し、内職を含めれば100名を超える人々が製作に関わっている。業界では、日本製剣道具の「8割以上」がこの工場から世に送り出されているとも言われる。

川辺 実際には、それ以上の数の防具を世に出していると感じています。

そして、もうひとつの拠点が、全日本剣道具の海外自社工場である。

川辺 海外にある全日本剣道具の工場は、日本資本100%、日本人が経営と品質管理を行なっています。企画・設計から縫製、検品、出荷まで、すべてを自社で一貫して行なう体制です。

現在、武器業界の多くは海外生産に依存し、海外の製造元から仕入れて日本で販売する形が主流となっている。そのなかで、日本企業が100%出資し、日本人が責任をもって運営する海外工場は、きわめて稀な存在だ。

川辺 効率よりも、「責任から逃げない構造」を選びました。工場も人も管理もすべて自社。問題が起きれば、必ず自分たちで向き合う。その覚悟があるからこそ、一つひとつの工程に妥協がなくなります。

技術水準は、しばしば「世界第二位」と評されるこ



全世界の日本製防具の8割以上を製作すると言われる日本剣道具製作所
(日本工場)



日本人による管理体制のもと生み出される防具
(海外工場)

川辺 長い歴史があるからこそ、慢心せず、つねに進化し、より良いものをと考える続けています。けつして過去の栄光ではなく、今も糸一本、針の一刺し、刺し幅のわずかな差、重さ数グラムの違いにまで目を行き届かせたいと語る。全日本選手権という最高峰の舞台でも日本剣道具製作所の防具を着ける選手が複数いるが、これも、日々の積み重ねの延長線上にあると川辺氏は考えている。

■「他を寄せつけない強さ」の理由は技術の差だけではない

品質と基準で世界を牽引したいと語気を強める川辺氏。世界の剣道家十人のうち一人、あるいは一人が、日本企業の手でつくられた防具を身につけている事実、川辺氏は深い感謝と誇りを覚えている。

この二つの工場から生み出される防具の数量は、月産約700、年間ではおよそ8000に達する(面・胴・甲手・垂といった防具単品に換算すると、年間約30000点以上を製造する)。一方、世界全体の剣道防具生産数は年間5万規模とも言われ、日本企業の手による防具は、そのうち2割にも満たないのが現実だ。数量だけを見れば、海外資本の工場群には及ばない。それでも、数ではなく信頼で選ばれる防具として、品質と基準で世界を牽引したいと語気を強める川辺氏。世界の剣道家十人のうち一人、あるいは一人が、日本企業の手でつくられた防具を身につけている事実、川辺氏は深い感謝と誇りを覚えている。

ともあるそうだが、それについて川辺氏はこう語る。**川辺** 順位を意識しているわけではありません。ただ、目標はつねにひとつ。日本剣道具製作所の水準に追いつくことです。海外工場の師匠は、日本剣道具製作所の先輩職人たち。その技と基準を、海外の現場でも寸分違わず再現し、いつか並び、そして超えたい。その想いだけで現場は動いています。さらに全日本武道具の海外工場は、つねに日本剣道具製作所の職人が指導と管理にあたり、技術と精神の両面で直結している。その体制こそが、他社にはない最大の強みだと川辺氏は言う。

川辺 日本一を決める場で弊社の防具を選んでいただけることは、現場で働く一人ひとりにとって、何よりの誇りです。

最後に、川辺氏はこう締めくくった。

川辺 剣道防具は、単なる用具ではありません。稽古の日々、試合の緊張、昇段の瞬間、人生の節目に寄り添う存在です。その道具をつくる責任の重さを忘れず、先人から受け継いだ技術と精神を、静かに、誠実に次の世代へつないでいく。そして、日本の剣道を支え続ける大切な役割を担い続けたい。その覚悟を胸に、これからもものづくりに向き合い続けます。90年にわたり守り続けてきた「逃げない姿勢」そのものが、他を寄せつけない強さだと思っています。手間を惜しまず、問題が起きれば必ず自ら向き合う。その積み重ねが、一本の糸や刺し幅のわずかな違いとなり、防具を身につけた瞬間の安心感として現われているのです。

「どこまでつくれるか」ではなく、「どこまで責任を負えるか」。「他を寄せつけない強さ」の根源にあるのはその覚悟である、と川辺氏は考えている。



案内人 **川辺尚彦**

(株) 日本剣道具製作所代表取締役
(株) 全日本武道具代表取締役

昭和55年熊本県多良木町に生まれる。多良木高校卒業後、大学を中退して武道具業界に飛び込む。25歳で独立し全日本武道具を創業、平成26年日本剣道具製作所の経営も手がける。平成29年自社海外工場を設立。令和元年、内閣総理大臣安倍晋三より首相公邸へ招待を受ける。市場80%以上の日本製剣道防具を製造。